くろーすビレッジ

～緑がつなぐ優しさの空間～

名前の由来

「くろーすビレッジ」。名前の由来は主に2つの単語から成っています。1つ目は「くろーす」について。

建物に布を使っている → cloth (布)

人と人
人と緑
人と地域
の距離が近い建築 → close (=近い)

「クロース」 → 「くろーす」
柔らかいイメージ
親しみやすさ

2つ目は「ビレッジ」について。
これは「村」を意味する言葉です。この建築は3つの棟から成っていて、それぞれに様々な商業店や人々の活動の場、反対に休憩できる場など色々な要素を含んでいます。全部合わせてみると、まるで1つの村のような活気とコミュニティが溢れているような場所なのです。そうであってほしいという願いも込めてこの「ビレッジ(=村)」という名前をつけました。
また、日本のグローバル化にも伴って、外国人の方でも親しみやすいようにと、英語由来の名前にしました。

現代社会の現状と建築ができること

・少子高齢化 — 増えていく高齢者をいかに支えていくかが問題になっています。私は特に高齢者にとっての居場所が少なくなっていると感じます。孤独死といったことも増えている中で地域の人々とつながりを持って、高齢者となっても住みやすい、心の依りどころとなる場所が必要だと思います。

例えば… 私の祖父は今区民センターで高齢者向けの体操教室に通っています。通前は家にこもりがちでしたが、体操教室に通い始めてからは週一回のその日を本当に楽しみにしていて、交友関係も広がったようで、一層生き生きとした姿が見られるようになりました。

・自治体の乏しい税収
少子高齢化の延長線上には自治体の財政難があります。国や地方の税収が減って、特に地方自治体では劣化した建物や交通機関などのインフラの老朽化が見られます。しかしその修復さえもできない現状があります。よって電車が廃止された地域もありますし、災害が起きた時、崩壊の危険性も考えられます。
地方のお金を増やすための解決策は、**持続可能な「マネタイズ」**だと思います。くろーすビレッジは、様々な商業施設が複合している場所です。ここで出た利益の一部を地方自治体機関へ寄付します。また他の一部はくろーすビレッジの維持費やくろーすビレッジ主催のイベント、ワークショップの予算とします。
このように、くろーすビレッジにはマネタイズの仕組みがあり、持続可能な地域の姿を作り出すことができるのです。

「マネタイズ」とは…
2007年頃からWeb業界などで使われるようになった言葉で、ネットの無料サービスから収益を得る(=**収益化**する)という意味。
⇓
持続可能な仕組みが成立するには、**お金の裏付けが不可欠！**

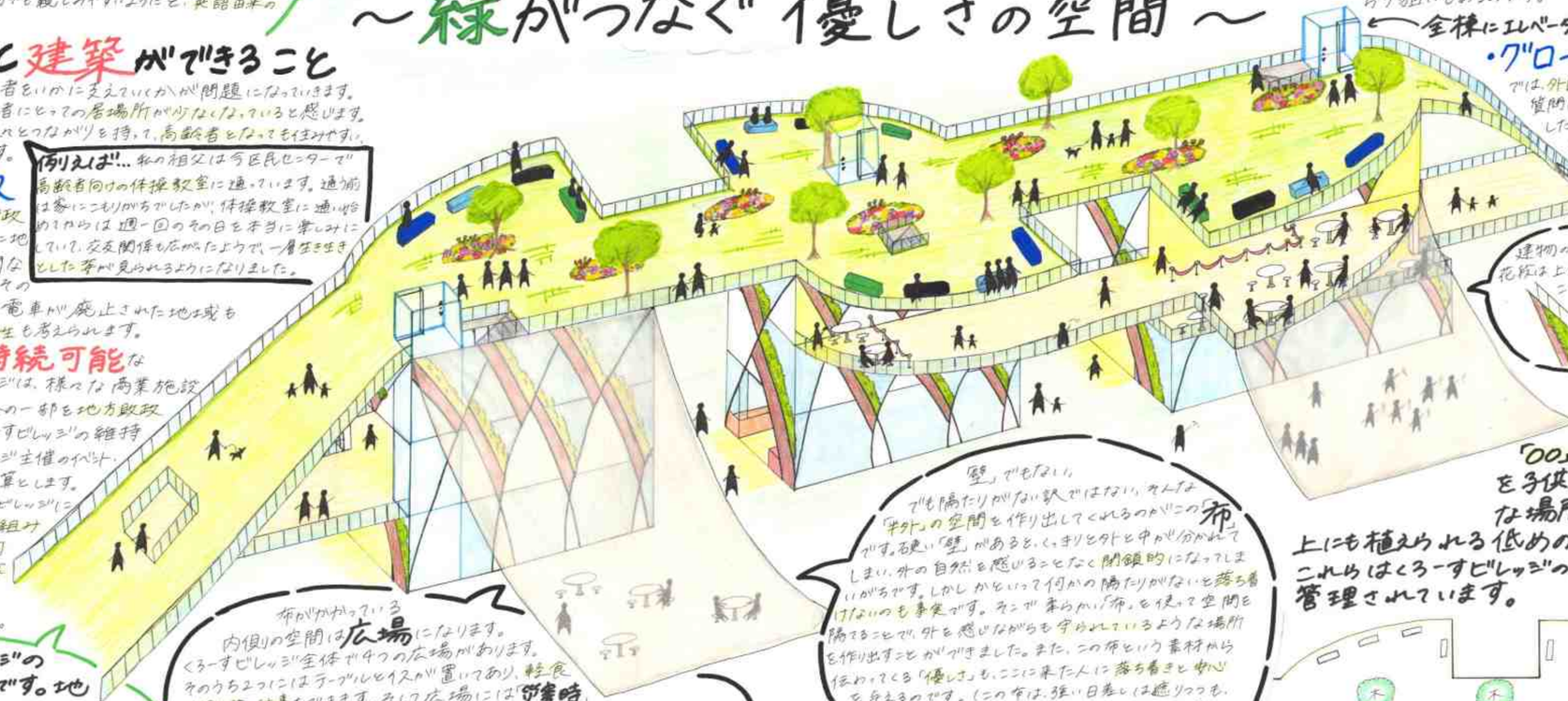
最大のこだわり ー 優しさ

布という素材の柔らかさ、そして緑を多く使うことで生まれる自然のぬくもり。外見だけではありません。子供から高齢者、外国の方まで、全ての人にとって「優しい」建築を心がけました。そしてそれは現代社会の問題に対しても同じです。社会に、地球に「優しい」建築を提案したい、私はそう思うのです。その「優しさ」が、明るい未来を導いてくれると信じています。
この世界の全ての人に、地球に、社会に、「どうぞ」と言える建築は「優しさ」から生まれるのだと思うのです。

・地球温暖化 — くろーすビレッジでは全体的に自然を多く取り入れています。まるで丘の上の公園のようなイメージです。人々に自然のぬくもりを感じてもらい、もっと地球環境について考えてもらう狙いもあるのです。

← 全棟にエレベーターを置くなど ユニバーサルデザインも意識しました。

・グローバル化 — 先ほどの名前の由来だけでなく、くろーすビレッジ1階にあるインフォメーションセンターでは、外国人の方でも気軽に質問できる環境が整っています。質問内容は基本何でも良いです。例えばこの地域に引越したばかりでまだまだ不安なことがいっぱいある方や、もちろんくろーすビレッジのご案内もできます。インフォメーションセンターのスタッフは外国語が堪能な人を採用し、もしそのような方がこの地域にいらっしゃったら、ボランティアとしてインフォメーションセンターに関わってもらうことも可能です。このように、外国人の方が安心して住める、過ごせる町の姿を、このくろーすビレッジが作り出します。



建物の側面の花壇は上から見るとこのようになっています。

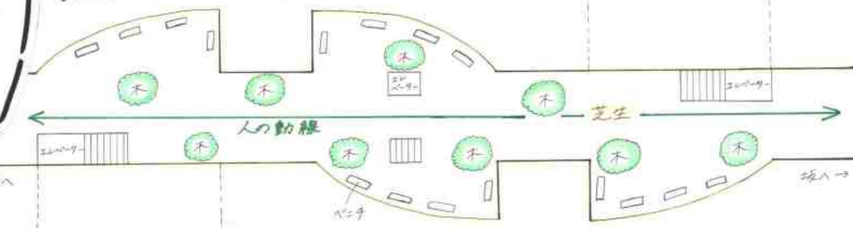
布がかかっている内側の空間は**広場**になります。くろーすビレッジ全体で4つの広場があります。そのうち2つにはテーブルとイスが置いてあり、軽食や勉強、仕事もできます。そして広場には**「災害時」**の役目があります。もちろん避難場所としてもですし、人々が集まって助け合える場所として重要になってきます。災害時に、皆が「とりあえず」集まれる広場の存在があるのとないのとでは全然違うと思うのです。

「壁」でもない、でも隔たりがない訳ではない、そんな「半外」の空間を作り出してくれるのがこの**「布」**です。硬い「壁」があると、くっきりと外と中が分かれてしまい、外の自然を感じることなく閉鎖的になってしまいがちです。しかしかないって何かの隔たりがないと落ち着けないのも事実です。そこで柔らかい「布」を使って空間を隔てることで、外を感じながらも守られているような場所を作り出すことができました。また、この布という素材から伝わってくる「優しさ」も、ここに来た人に落ち着きと安心を与えるのです。(この布は、強い日差しは遮りつつも、太陽光の明るさはかなり通すものです。また、小雨の程度であれば雨も防げます。)

(2階以上)
どの階にも、くろーすビレッジ3つの建物を端から端まで通り抜けられる動線がしっかりと作られています!! ⇒ 全ての棟に足を運んでもらう工夫

Roof

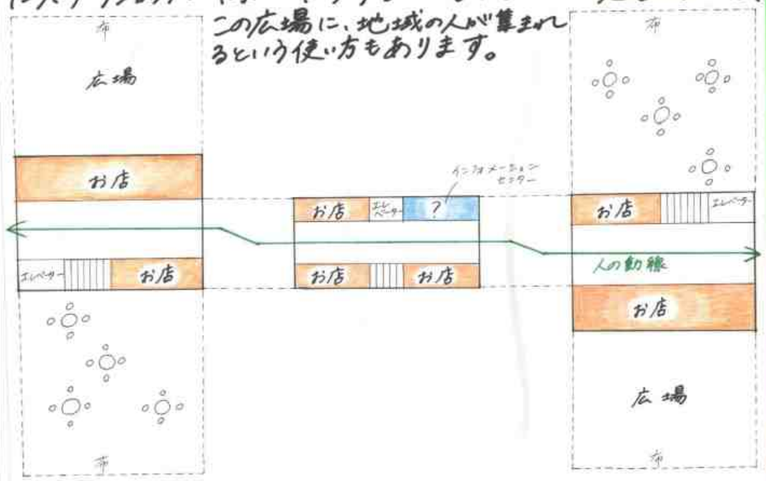
屋上は、公園や庭園といった形で、具体的に「○○」とは決まっていません。自然が溢れるこの空間を子供達は遊び、大人は一息つける、散歩できるような場所として使えます。屋上にも植えられる低めの木や花などがあり、これらはくろーすビレッジのスタッフによって維持管理されています。



1st floor フロアガイド

1階の中はまるで小さなアーケードのようになっています。何個かのお店があり、それぞれ地元のお店です。お店は期間限定のものにしてなるべく多くの地元の方にくろーすビレッジのコミュニティに加わってもらいます。布の下の広場では、テーブルとイスで一息つけたり、ワークショップが開かれたりすることもあります。災害時には、この広場に、地域の人が集まれるという使い方もあります。

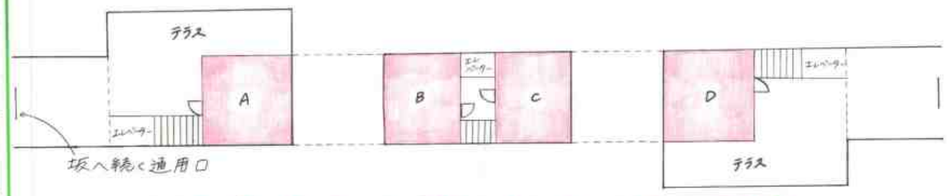
軸を担っているのはこの緑の道です。地面から伸びた緑の道が高い所まで伸び、それに沿って3つの「ビレッジ」が連なっています。



2nd floor

芝生の橋の途中の穴を通ると、そのまま2階に繋がります。この階は主に貸スペースです。全部でA～Dの部屋があり、くろーすビレッジのウェブサイトか電話で予約すれば誰でも借りられます。例えば地元の高校生が学校外で部活の練習をしたい時、特に音楽など文化系であれば有効に使える空間です。また、何かのレッスン教室を開くことも可能になります。地域の人が気軽に利用できるフリースペースとなっているのです。そして、くろーすビレッジ主催のワークショップもここでひらきます。このように、用途は
- 高齢者向けの体操教室やお茶・囲碁教室
- 子供向けの絵画教室
- 主婦の方向けの料理教室

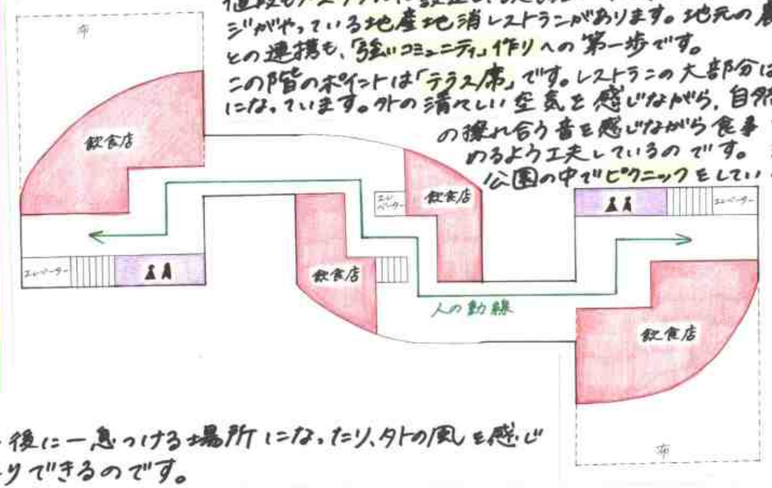
などレパートリー様々です。



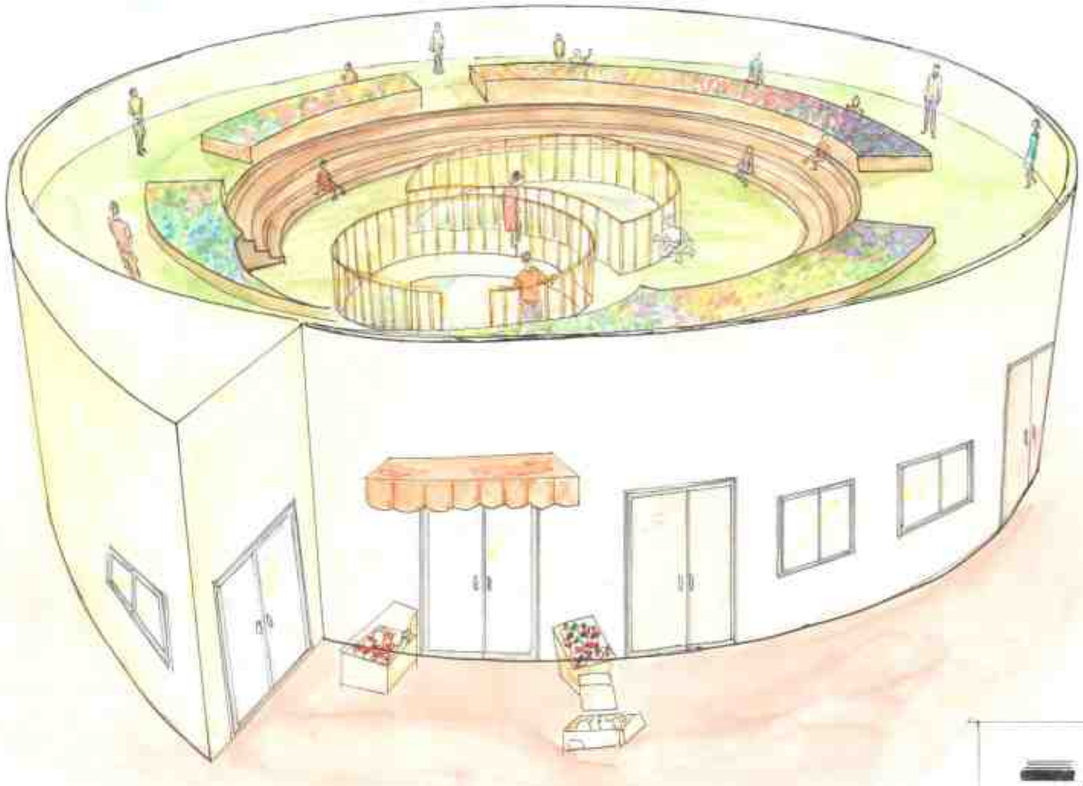
ただ目的は、地域の人に、地域のコミュニティで楽しんでもらうこと。そこでできた強く活発なコミュニティが他の地域から、日本をこえて外国からの人まで引きつけるきっかけとなるはずです。
2階にあるテラスは、いつでも誰でも自由に使えるスペースです。貸しスペースに行く前・後に一息つける場所になったり、外の風を感じながらテラスにあるイスと机を使って1人で仕事や勉強、さらに飲食を済ませられたりできるのです。

3rd floor

3階は、主に飲食店エリアです。おしゃれなカフェやレストラン、子供連れやお年寄りでも来やすい環境を整えています。
値段もリーズナブルに設定し、飲食店の中の1つには、くろーすビレッジがやっている地産地消レストランがあります。地元の農家さんとの連携も、「強いコミュニティ」作りへの第一歩です。
この階のポイントは「テラス席」です。レストランの大部分はテラス席になっています。外の清々しい空気を感じながら、自然の葉の擦れ合う音を感じながら食事を楽しめるよう工夫しているのです。まるで公園の中でピクニックをしているような気分になれます。



買い物だけじゃない!?スーパー



コンセプト

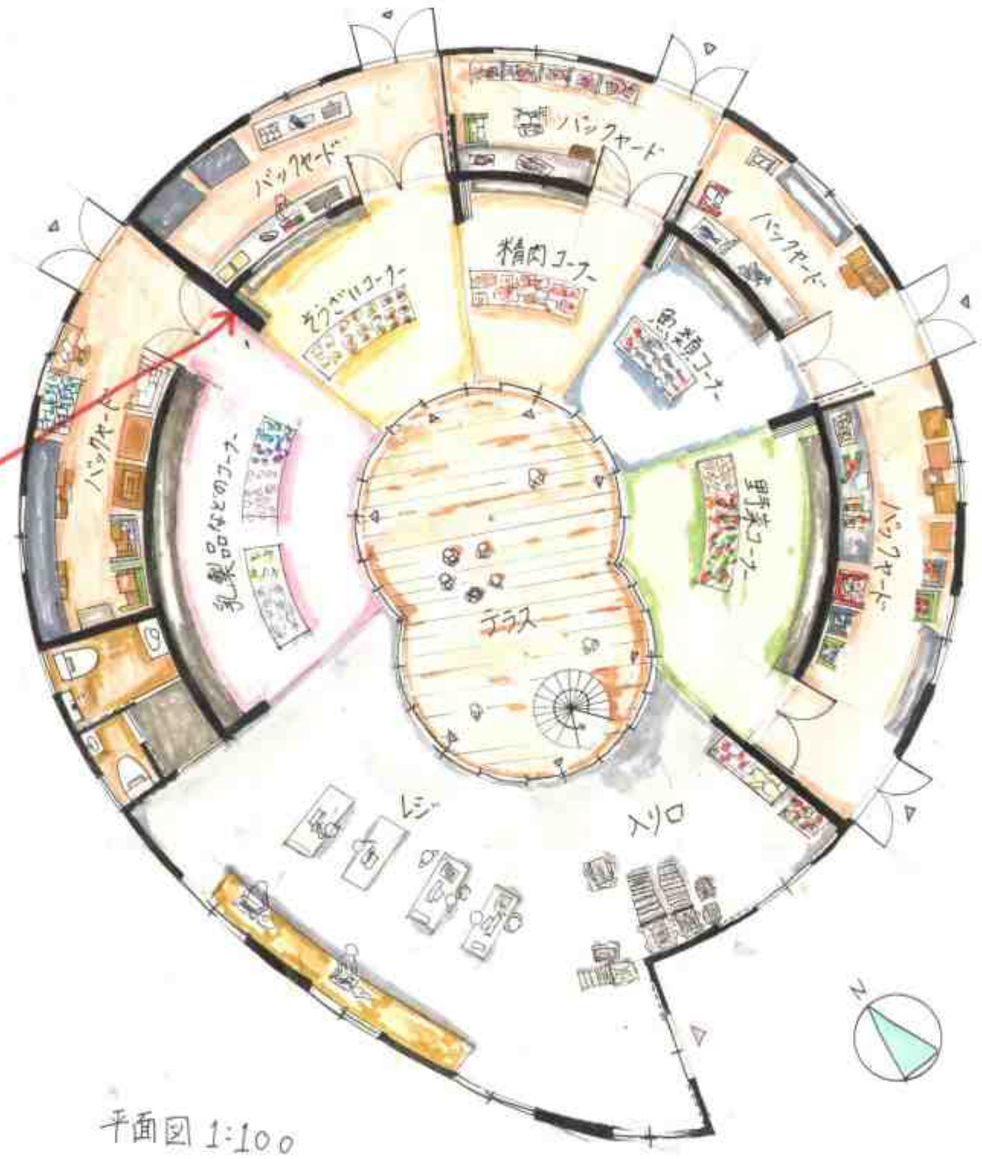
「スーパーマーケットへ行く」それは、日常生活の一部である。また、様々な職業の人、世代の人が集まるのが、スーパーである。多種多様な人が集まるスーパーだからこそ、人が1番集まり、1番よく使用されると思う。

「どうぞ」は、人と人の営みの中で生まれるもので、一定の世代の人など特定された人だけでなく、様々な人がかかわることで最高の「どうぞ」が生まれ、そして人と人のつながりがうまれる。

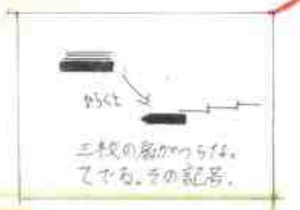
そこで、"「どうぞ」×「スーパーマーケット」"を提案する。

スーパーマーケットへ行くことは日常的で生活の一部であるから、ストレスをためないようにする必要がある。だが、小さな子どもと親が買い物へ一緒に行くことはそれだけでたくさん事件がおこり、親にストレスがたまる。そして子どもにとっては、買い物についていくことは、長く退くつで"がまん"の時間となりストレスがたまる。

ストレスがたまらず、快適にすごせ、人と人の間で「どうぞ」が生まれつながるスーパーを考えた。



平面図 1:100



ダイアグラム

買い物中に子どもがいると

購入前の商品を触ったり、開けたり、つぶしたりしてしまう。

店内で走りまわってしまう。

「買って!買って!」と駄々をこねてしまう。

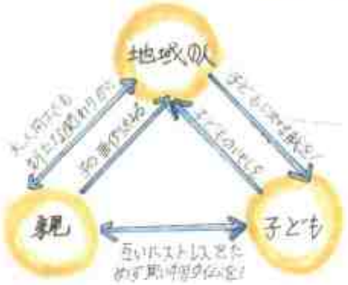
スーパーで親とはぐれ迷子になる。

改善法

スーパーの中心にテラスを設置。

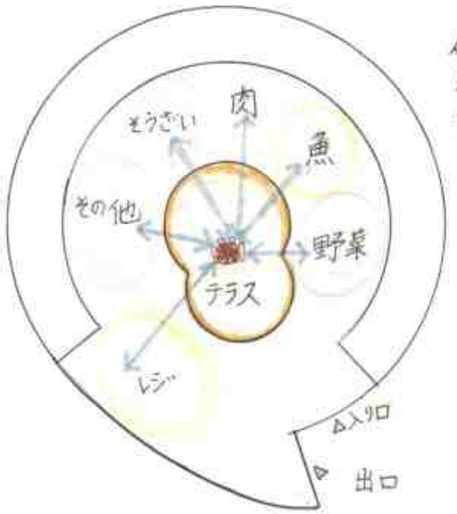
親が買い物をしてる時、テラスでまてる。地域の人などが中心に自分の趣味などをシェアする場にもなる。

どうぞの関係



・テラスでは、地域の人や高齢者が子どもに趣味や特技をおしえる教室を開くことで、子どもには、学校では学べないことが学ぶことができ、地域の人は新たなおしゃべり仲間ができる。

建物の形について



買い物をしている親とテラスで遊んでいる子どもが、いつでも互いの顔を見合わすことのできるように建物の形を円形にしその真ん中にテラスを設置した。このようにすることで親が安心して買い物ができ子供の楽しんでいる姿を眺められる。

テラスの利用法

様々な趣味

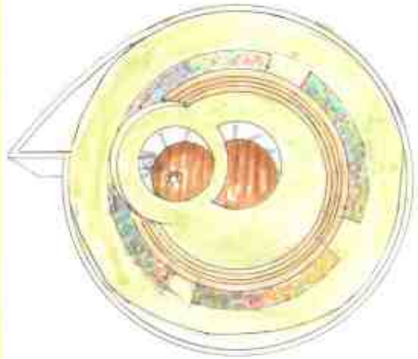
SDGs 1 4 8 11に貢献

テラスは地域の人との交流の場。親をまっている時間に地域の人が趣味・特技を無料で子供におしえる青空教室をつくる。7人に1人の子が貧困であるこの日本は、家庭ごとの教育格差が問題である。更に母子家庭の子は、家で1人でいることも多い。だから、スーパーに用がない子でも利用できるようにすることで教育格差の問題に貢献。

冷蔵のショーケースの高さについて

普通のスーパーはショーケースの高さは160だけど、小さい子でも届くように120にした。スーパーの商品棚の数が少ないので、下に新しい商品を加えました。

屋上の利用方法



地域の人や子供が主となって花を育てる

⇩ メリット

1. ストレス軽減効果。
2. 認知機能の回復効果。
3. 社会性が向上する効果
4. コミュニティが育つ。
5. 責任感がでてくる。

⇩ 更に

お花があることでスーパーの外観がよくなり、新しいお客も来て、更に人のつながりUP!!

SDGs 3. 8. 12. 15に貢献。

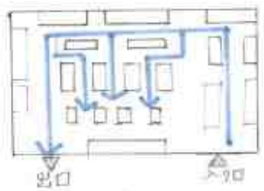
スーパーの2種類の使い道

1. 子どもは学べ親はゆっくり買い物!!スーパー

普段、スーパーは、主婦が利用することが多い。特に、小さい子供がいる主婦にとって、買い物を一緒にするのは、子どもにとっても親にとってもストレスがたまる。そこで、買い物している時親と子どもはいる場所をかえる。

動線のちがい

通常のスーパー



動線が複雑で、子どもが迷子になった時に見つけるのが大変である。1番隅までいくのに遠い。

動線が単純であるため子どもが迷子になった時みつけやすい。1番隅まで行くのに四角形の隅ほど遠くない。

テラスが出口とつながっていないからお会計前でも出ることができる。

会計方法のちがい

1. スーパーの時。

たくさん、物を買う主婦などは、普通のスーパーのように最後にまとめて会計。

2. 子ども用商店街の時

会計は各ブースごと行う。会計はレジでなく電卓を使い子どもが自分で計算。

↓

計算能力UP↗

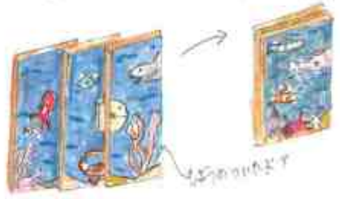
2. 子ども用商店街に化ける!?スーパー

おつかいデビューは、5歳から小学1年生が多いというデータがある。子どもの時に大人に交じって、買い物をするのは危険である。そこで数日に1回、小学生の放課後の時間(15:00〜17:00)や休日を使い子ども限定商店街になる。

1つ1つのブースが独立していて、小さなお店が連なる商店街のようになっている。

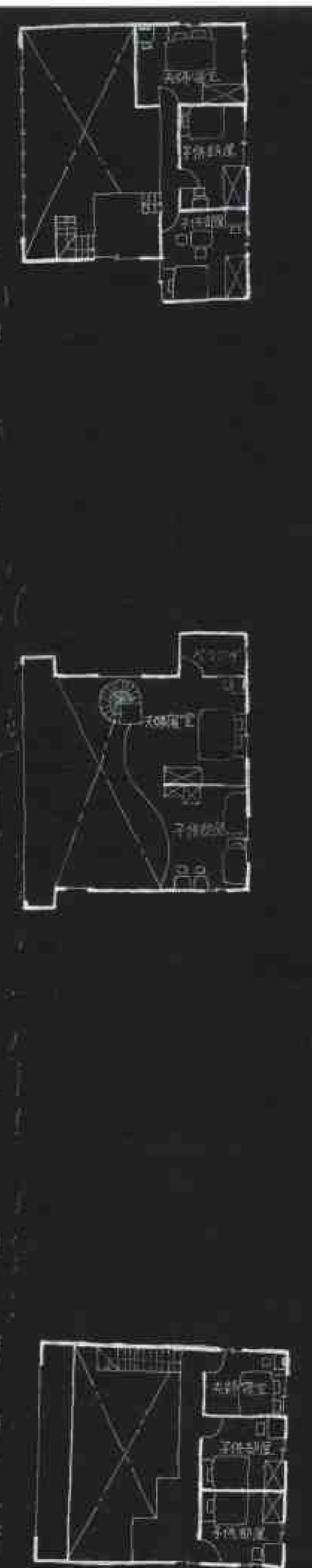
⇩ メリット

1. 店員さんとの距離が近くなり、コミュニケーション能力UP↗
2. 買いたいものがみつかりやすい。

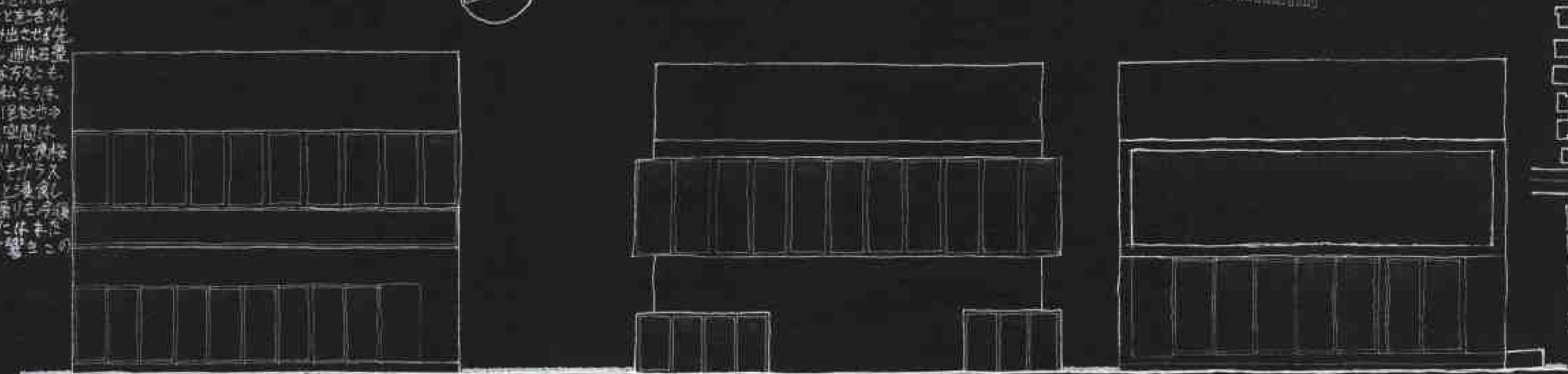


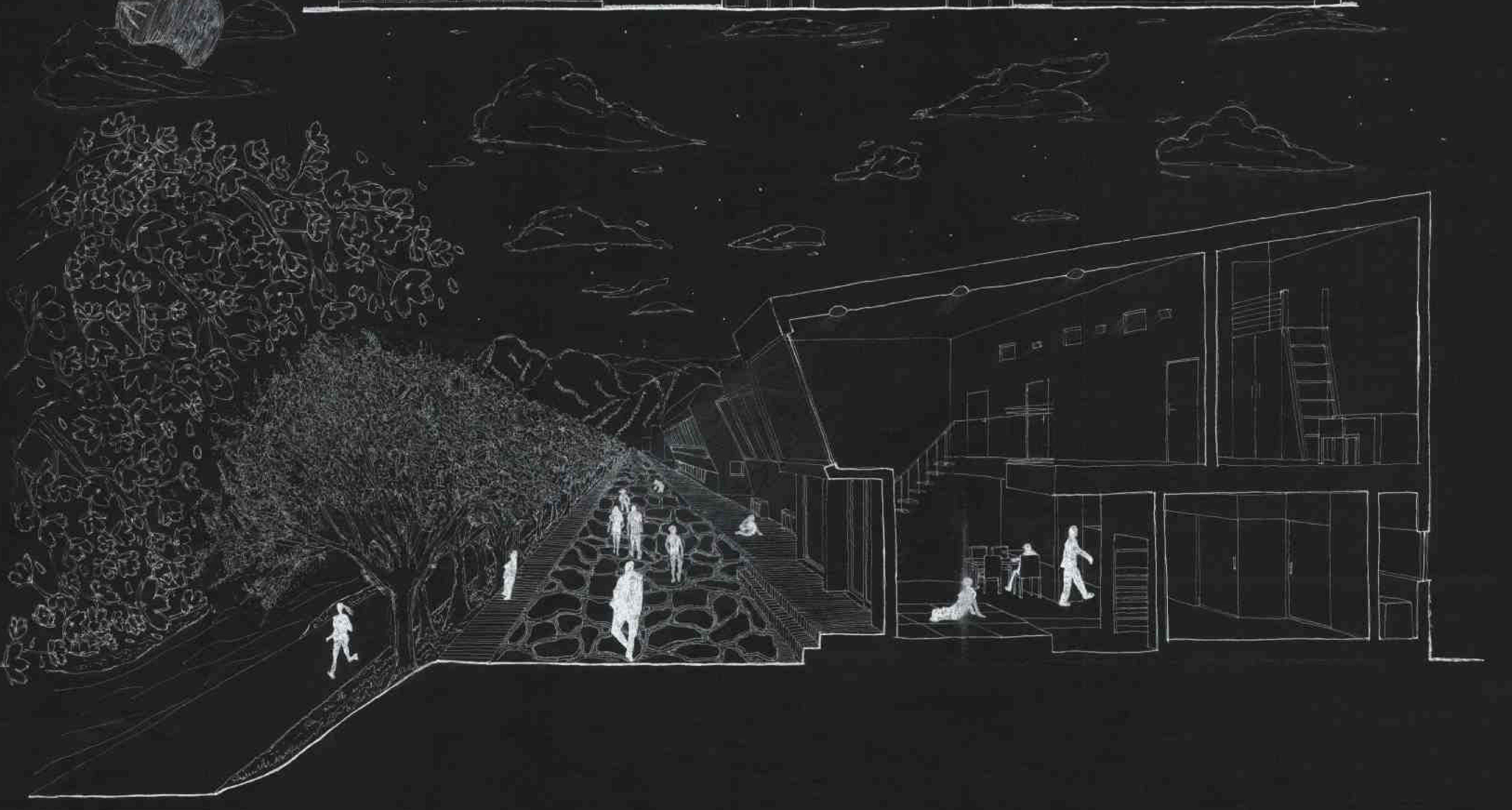
子ども用商店街にする時は、とびらをたして付け足す。

街明かり ~まちを活性化する川路地リビング~



私の街は、埼玉県草加市に位置する。私の街には問題点がある。それは夜の防犯上の問題だ。街灯が少なく、時には真っ暗になる。私の街には千本桜通りがあり、土手もある。しかしこの通りは夜になると真っ暗でなかなか夜桜も見れないし防犯上もよくない。これでは住人さんが見に来てくれないし、街の活気がでないと思う。そこで私たちが考えた。私たちの住宅は川に向かって建物が建っている。私たちの生活を街に溢れ出させてみようと思いました。これは[illegible]ことを[illegible]ます。まず、私たちの生活の中の明かりを街に溢れ出させます。溢れ出させる[illegible]は道、私たちです。そうすることで街の中で共有しあえる空間となり、道は[illegible]として新たな川路地リビングとして登場し子供や老人お年寄り、お体の不自由な方なども心地良く過ごしていきやすい街になることを目指した。個性のあるが私たちの空間にボリュームを持たせ、1階はオープンな住まいとリビングや川路地から千本桜の川と連続した空間となる。住まいは吹き抜けを基本とし、空間は外側に[illegible]、ガラス窓を桜の木の方向に傾けた。やわらかい明かりで桜を見てい心地良く感じてもらうための仕掛け。人は住まいの中からもガラスごしに楽しめる。そのような街に対する思いがやがて人から人へと連鎖していき、私たちは街の一部となります。かつて賑わいだった千本桜通りも今後は人が集まり町の行事も活発になる。来年の千本桜シーズンには住まう川路地リビングから道を通って訪れる人々の賑やかな声が響き、この街の新たな物語のページが追加される。





OTONARINO おトナリノ スズラン SUZURAN

昔は活気にあふれ，まさに「どうぞ」の建築だったすずらん通り商店街。
今や，昼と夜とで顔を、その姿を変えてしまった。
郡山の強みである「音楽」というツールを加え，新たなすずらんアーケード街を提案する。
笑顔や音鳴りあふれるアーケード街は、お隣との交流栄えたあの頃のような商店街に生まれ変わる。

すずらんの花言葉は「再び幸せが訪れる」である。

I 敷地

郡山駅西口駅前広場から南北に走る通りを隔てて，ホテルと飲食ビルの間から続く駅前アーケード商店街は，東西に 130m，南北に 158mの通りが十字に交わった形をしている。その広いアーケード内には数百店舗にわたる店が並んでいる。

II 歴史

昭和初期に「すずらん通り商店街」として設立。街灯の傘がスズランの花のような形をしていたことから，この名がついた。1948 年，76 棟を全焼し，421 人が焼き出される「柳町大火」があった。戦災と大火からの復興へ向け，商店主らが足掛かりとして考えたのが，アーケードだ。雨の日でも買い物が楽しめるよう，通り全体に屋根を付けたそれは，1958 年に完成にし「すずらん通りアーケード商店街」として生まれ変わった。その後商売が盛んになり，かつての賑わいを取り戻した。商品を売る，買うといったやり取りの中に，相手を思いやる気持ちが込められていた。復興を目指し，一人ひとりの生活を整え，この町の活気を取り戻すため，様々な人に訪れてもらいたいという思いは，まさに「どうぞ」の精神であったと考える。

III 現在の駅前アーケード街

すずらん通りアーケード商店街は，老朽化に伴い 1973 年に架け替え，現在の名である「駅前アーケード商店街」となった。駅前と歓楽街を結ぶアーケード街となったが，店舗が居酒屋メインで構成されているため，昼に利用する人は次第に減っていった。反対に夜は，人通りが多くなり賑わいを見せる。昼と夜とで全く違う印象を持つこの場所は，郡山の中心地にも関わらず暗く近寄りがたい雰囲気があり，利用している人の評判は「治安が悪い。」「朝はゴミが散らかったままで汚い。」などあまりいい印象ではない。広い敷地で数百店舗にわたる店があるにも関わらず，昼はシャッターが閉まった店舗が多い。現在では，社会情勢も重なり空き家や空き地が増えた。先人達が復興を目指し，賑わいを取り戻した頃の「どうぞ」の精神が薄れてきているように感じる。

IV 音楽都市

郡山市は 2008 年に「音楽都市」を宣言した。東北一の設備を誇る市民会館、日本最大規模の野外ロックコンサートの開催など，音楽と深く関わってきた。また，多くの学校の合唱部や吹奏楽部は，全国大会に何度も出場しており音楽に力を入れていることがわかる。そこで，このアーケードに郡山市の強みである音楽を融合すれば昼も利用する人が増え，再び賑わいを取り戻し，現在のアーケード街の印象を払拭できるのではないかと考えた。

V 駐車場の活用

広い駐車場の土地を活用して，スキルアップを目指し練習ができる施設を設ける。（どうぞ練習してください）壁をあまり設けずにオープンな空間を作ることで，誰でも入りやすく，音楽がさらに身近に感じられる。
すずらんは茎を中心に枝分かれし，花を咲かせる。形が特徴的な花に思わず目が留まってしまうが，茎が支えない限り綺麗な花を咲かせることはできない。音楽も日頃の練習の積み重ねに支えられながら，ステージで花を咲かせる。ここで練習をし，支えとなる「茎」を育て，アーケードという「葉脈」をたどり、ステージで「花」を咲かせることができる。

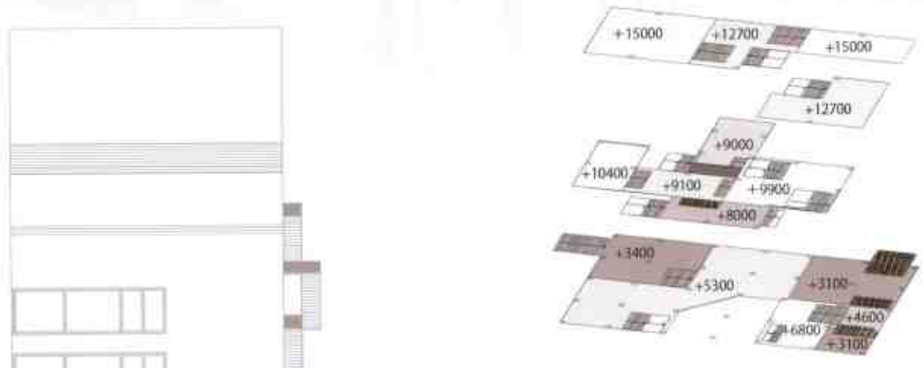
VI 空いている屋上を活用

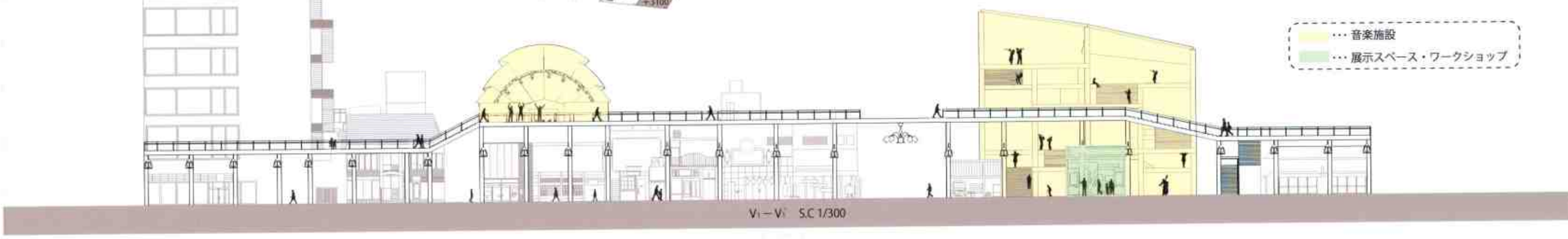
空いている屋上を活用しライブ会場を設ける。（どうぞお聴きください）こうすることで，音楽が好きな人々や，普段直接音楽に触れる機会が少ない人々が気軽に集うことができる。同じ音楽を共有することで，新たなコミュニティの場が生まれる。商品から音楽へ形を変え，かつてアーケードが栄えていたころの思いやりの気持ちや，「どうぞ」の精神が浸透していく。

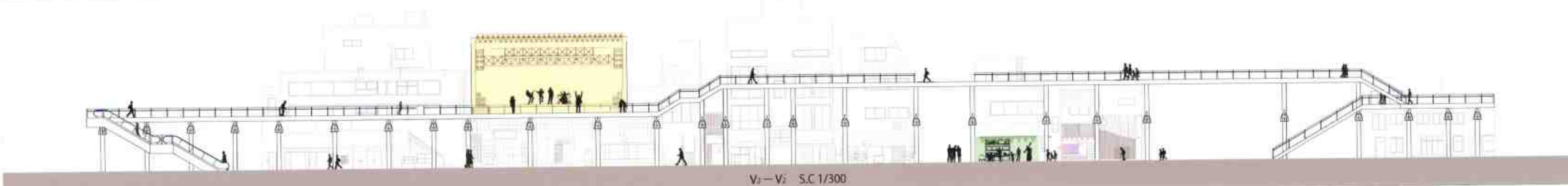
VII 空き店舗の貸し出し

空き店舗の貸し出しを行い，ワークショップや展示スペースを設ける。ワークショップでは，楽器を奏でたり，歌を味わったりして，音楽を楽しむ体験ができる。（どうぞご一緒に）
また，幅広い年代に必要とされるアーケードにするため，一例として高齢者に合わせたワークショップを開くことで，駅周辺に立ち寄らない高齢者の立ち寄るきっかけをつくる。一方高齢者が，若者に馴染みのない楽器を教えるなどして，様々な年齢層との交流を深める場となる。（どうぞお立ち寄りください）展示スペースでは，アーケードや音楽都市の歴史資料を展示する。（どうぞご覧ください）歴史を共有することで先人達が現在まで繋いできた思いを「音楽」という新しいツールを入れ次世代へと繋ぐ。

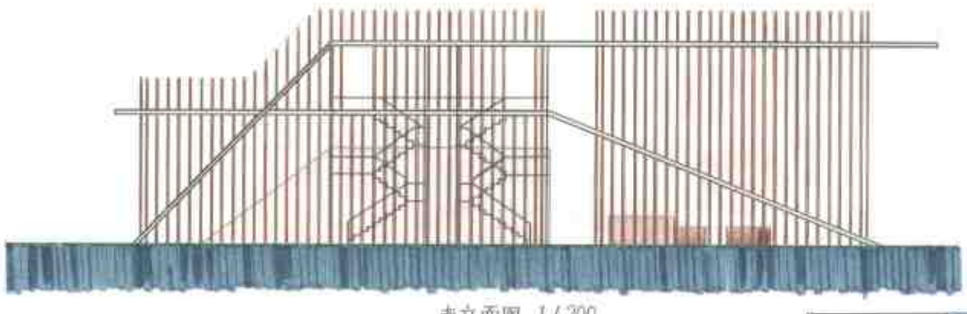
今後アーケードが姿，形を変えても「どうぞ」と思いは繋がれていく。



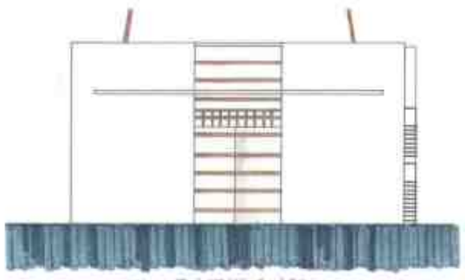




自由で、閉じない。

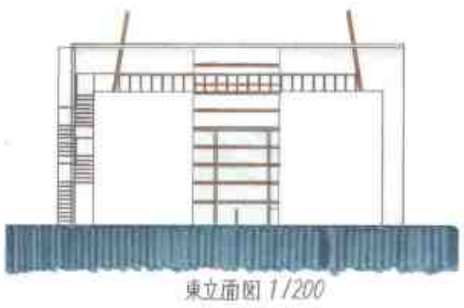


南立面図 1/200

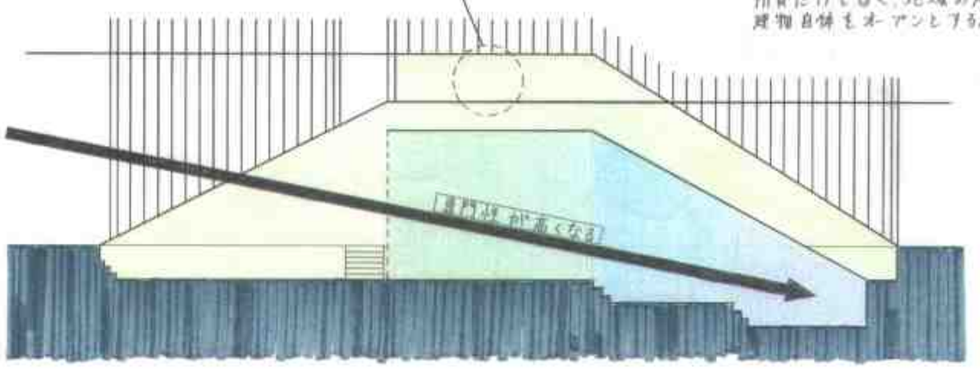


西立面図 1/200

天井ガラスの採光を取り入れるため、穴をあける。自然光と風を感じながら、自由な時間を過ごせる。



東立面図 1/200



〈三次市〉
広島県三次市は、中国地方のほぼ中央に位置し、山陰と山陽を結ぶ交通の要衝という環境のもと古くから栄えてきた。
三次市の有名なものとして、「霧の海」「庄関山公園」「三次もののけミュージアム」「三次ワイン」「三次人形」「鵜飼」など、数々の名所や文化財に登録されているものがある。
文化人としては、「奥田元宋さん・奥田小由女さん」「辻村寿三郎さん」がいる。

働く場（建築設計事務所）と、憩いの場を融合させ、誰でも自由に使用できる建物にした。
新型コロナの感染症にともない、現在の働くスタイルが見直された。都市部に集まらず地方で働くスタイルが増えてきて、新型コロナウイルスと共に共生していくことが日常化してきた。
仕事と生活という境界線もっくちないことで働くことと生活が緩やかに混ざり、「どうぞ」の空間が生まれる。

1. コーヒーも「どうぞ」

建物内に、小さいカフェスペースを設ける。事務所の所員の人や、訪れる人が自由に使用できる。

2. 自然を感じながら「どうぞ」

屋外のみならず、室内にも数多くの木々や緑を植え、人と自然の境目を引かない。また、建築物を取り囲む木材の間は開じず、風が通りぬけるようにしている。清々しい空気に包みこまれながら、コーヒーを飲んだり、仕事をしたり、休んだりできる。

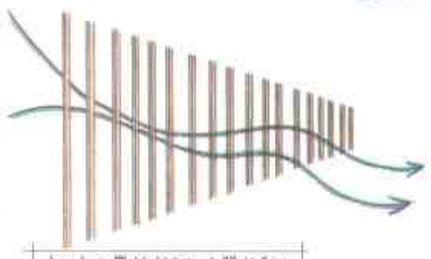
3. 誰でも「どうぞ」

所員だけでなく、地域の人、大人、子供など問わず、誰でも利用できるスペースを設け、建物自体をオープンとする。

4. 自由な場所で「どうぞ」

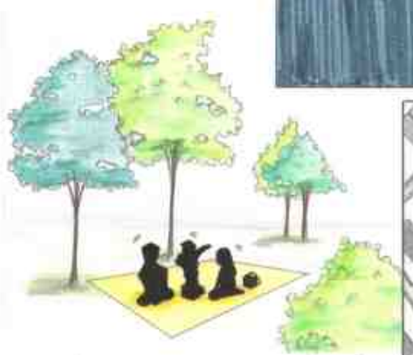
決められた場所で働いたり、コーヒーを飲んだり、休んだりするのではなく、どこでも自由な場所で自分の時間を活用してもらう。

下方に行くにつれ、設計事務所としての専門性、オフィス性が高くなる。
目に見える壁の境界でなく、床に高低差をつけて、あいまいな境目にすることで、空間の質に変化をつけました。



木と木の間はガラスで閉じることなく、新鮮な空気がいつでも流れ込む。半室外的な雰囲気となる。

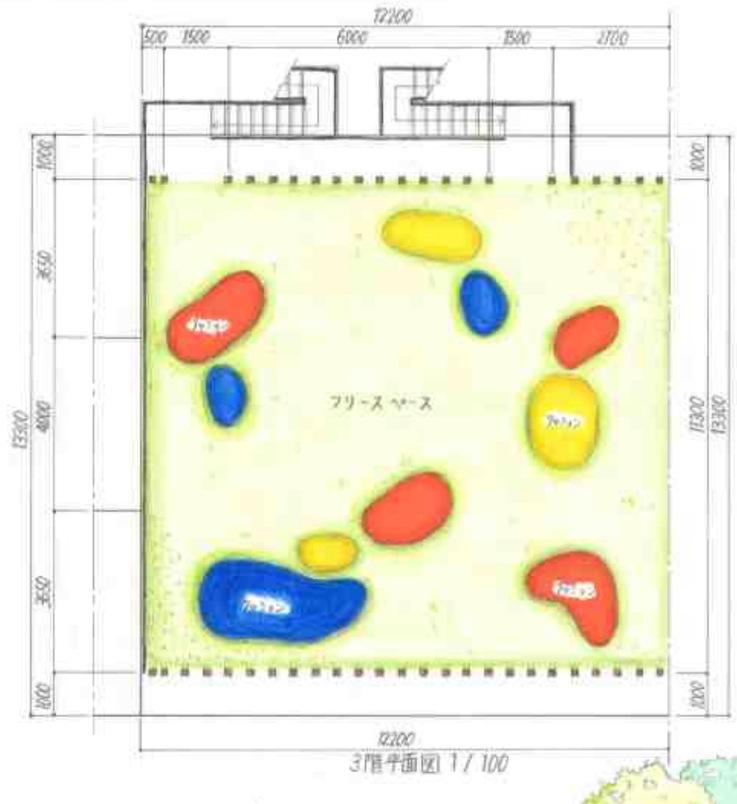
AA断面図 1/100 （※室内植栽は、移動式家具は省略しています。）



敷地内で、家族もろっと、ピクニックや、散歩など楽しむことができる。

配置図 1/1000

2階平面図 1/100

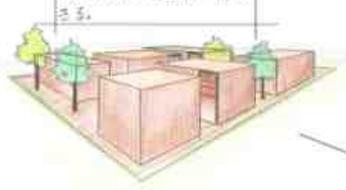


3階平面図 1/100

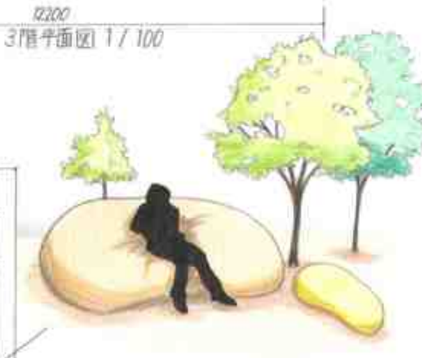
建物内に置く小さなカフェで、一息。寄れに訪れるもよし、休憩に一杯するもよし。

1階平面図 1/100

個々に独立するワークスペースは、まるでオフィスタウンの様。一般の人でも自由に利用できる。



ベンチと机が一体式になっているため、ちょっとした読書や、飲食など、使いかたは自由である。



所員のつかれを癒やすため、事務所内に休憩スペースを設け、クッションで、ふたりゆったりできる。

設計事務所、ということもあり「集中したい、人目をあまりたくない、ということも多々と思うので個人スペースを設ける。